都城市文化財調査報告書　第125集

都城市内遺跡 9

- The Sites excavated in Miyakonojô City (9th) -

2016
都城市教育委員会

序

本書は、都城市教育委員会が国・県の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の記録です。各種開発に対し、埋蔵文化財の保護を目的とする試掘・確認調査を行い、協議における基礎資料としました。

この報告書が文化財行政の一資料としてだけではなく、学校教育・生涯学習の場などで広く活用され、地域の歴史を知る手がかりとして活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、多大なる御協力を賜りました各関係機関、地域の皆様に対し深く感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月

都城市教育委員会
教育長　黒木哲徳

例言

1．本書は、都城市が平成 27 年度に国宝重要文化財等保存整備費補助金及び宮崎県埋蔵文化財緊急調査補助金を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 補助事業の事業主体は都城市、調査主体は都城市教育委員会である。

3. 調査の目的は、都城市内の各種開発予定地における埋蔵文化財の有無及び遺存状況の確認である。

4. 本書では、平成 27 年度に実施した試掘・確認調査・工事立会のうち、補助事業として実施した 25 件、平成 26 年度に実施した工事立会 1 件の概要を報告している。

5. 現場における記録写真の撮影及びトレンチ配置図・土層断面図の作成・製図、調査概要の作成は、各調査担当者が行った。

6. 出土土器・陶磁器の実測は、調査員の指導のもと整理作業員が行い、製図は同市文化財課主査近沢恒典・同市文化財課主査山下大輔が行った。石器の実測・製図は同市文化財課主査栗山葉子が行った。

7. 本書の作成は、各担当者が作成した調査概要・製図・写真をもとに近沢が中心となって行った。

8. 現場における測量には遺跡調査システム「Site Xross」、本書に使用した図面の製図・編集には「トレースくん」・「Adobe Illustrator CS5.5」・「Adobe InDesign CS5.5」を使用している。

9. 本書の調査区位置図に示している「過年度調査調査地点」は、本年度以前に試掘調査・確認調査・記録保存を目的とする発掘調査のいずれかを実施した地点である。

10. 出土遺物及び各種記録類は、都城市教育委員会で保管している。

目　次

1．試掘・確認調査の概要 …… 1
2．祝吉第３遺跡①・② …… 5
3．狸穴遺跡 …… 6
4．梅北北原遺跡 …… 7
5．中町遺跡 …… 10
6．都城跡 …… 11
7．上ノ村第２遺跡 …… 13
8．田谷・尻枝遺跡 …… 15
9．祝吉第３遺跡③ …… 16
10．都城領主館跡 …… 18
11．高田遺跡①・② …… 19
12．八幡城遺跡 …… 23
13．上ノ園第１遺跡 …… 25
14．村ノ前遺跡 …… 27
15．母智丘原第２遺跡 …… 29
16．中大五郎第２遺跡 …… 30
17．木ノ下遺跡 …… 31
18．年見川遺跡 …… 33
19．梅北北原遺跡（第２次調査） …… 35
報告書抄録 …… 40

都城市マイブンキャラクター「いそいちくん」　　都城市マイブンキャラクター「たむたむ」

1. 試掘・確認調査の概要

都城盆地は九州南部内陸部にあって、霧島火山群の東南のふもと、宮崎県南西部から鹿児島県北東部にかけて広がる。その起源は列島形成時の陥没帯とされる。基盤層は四万十累層群とされ、近隣火山群の強い影響の下、シラス台地等、火山噴出物起源の地形形成が発達している。南北に細長い盆地の周縁には標高 400 m 程度の山地が連なり、南のみが大隅半島にむけて開口する。四方より流入する河川群は、盆地を南北に貫流する大淀川へと収束されたのち、北縁山地を抜け宮崎平野へと至る。内部地形は大淀川を境に西側のシラス台地、東の扇状地性の低位段丘に大別される。

都城市は東西 25km、南北 35km、面積約 650 平方km、周縁山地を含む盆地の大半を占めている。人口規模は約 17 万人、中心的な市街地は盆地底南部の扇状地面に形成されている。

都城市内における「周知の埋蔵文化財包蔵地」は、山間部を除く各地形面にまんべんなく分布するが、大淀川やその支流沿いの河岸段丘面、台地縁部、開析扇状地の側端部における分布密度が高い。また、九州南部域では霧島火山群や桜島などの火山群から噴出したテフラが多く分布しており、遺跡調査の際の指標として利用されている。都城市内でも複数の火山灰層が確認されるが、目視同定が可能な次の 6 種が試掘・確認調査の際に多く利用される。霧島新燃岳享保軽石 (Kr-SmK・霧島火山新燃岳起源・1717)。桜島 3 テフラ (Sz-3・桜島文明軽石・桜島起源・1471 年)。霧島御池軽石 (Kr-M・霧島火山御池起源・約 4,600 年前)。鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah・鬼界カルデラ起源・約 6,600 年前)。桜島 11 テフラ (Sz-11・桜島起源・約 8,600 年前)。桜島薩摩テフラ (Sz-S・桜島起源・約 12,800 年前)[1][2]。

平成 27 年度、民間事業に伴う埋蔵文化財の照会件数は 211 地点 (集計数値は平成 28 年 2 月 17 日時点。以下同様) の記録が残り、公共事業に関しては、庁内の事業調査にて 136 事業が把握される。前年度と比較し、民間事業はほぼ同数、公共事業は 20 件程度の減少となっている。

試掘・確認調査は民間事業において 28 地点、公共事業では 10 地点の調査を実施した。民間事業では個人住宅や宅地造成、福祉施設、畜舎、土砂採取等多岐にわたり、公共事業では道路拡幅、農業基盤整備事業 (土層改良・天地返し)、公有地売却等が主体となる。これらの試掘・確認調査のうち、24 件を国・県の補助事業として実施した。

文化財保護法に基づく発掘届出 (文化財保護法第 93 条関係。以後、法と略記) は 23 件、発掘通知 (法第 94 条関係) は 19 件を宮崎県教育委員会へ進達・通知した。宮崎県教育委員会からの通知内訳は、記録保存のための発掘調査 7 件、工事立会 12 件、慎重工事 14 件、処理中 3 件、事後提出に対する指導 6 件である。発掘調査に関しては、都城市教育委員会が主体となった調査が 4 件、宮崎県埋蔵文化財センターが主体となった調査が 3 件である。

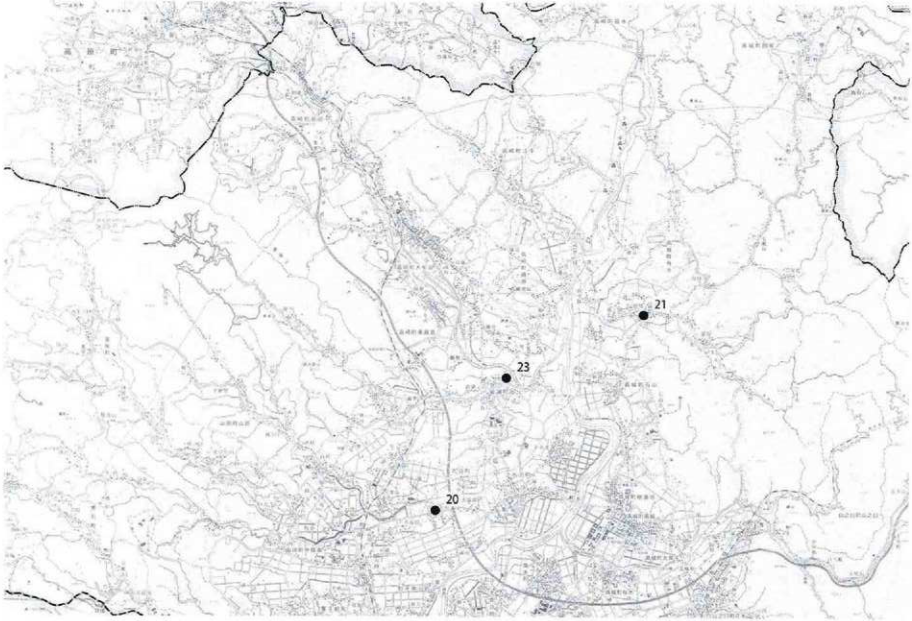
梅北北原遺跡 (第 2 次調査) は、平成 27 年 2 月に実施した工事立会であり、国・県の補助事業として実施した。平成 26 年度事業報告書[3] では一覧表での掲載のみとなっていたため、本書にて合わせて概要を報告する。

調査組織は次のとおりである。

調査主体　都城市教育委員会

教育長	黒木哲徳
教育部長	児玉貞雄
文化財課長	新宮高弘
副課長	武田浩明
主幹	桒畑光博
調査担当	桒畑光博　栗山葉子　近沢恒典　山下大輔　早瀬航　玉谷鮎美 (平成 27 年度)
庶務	畑中夏奈

1) 早田勉. 2006. 8.4 都城盆地とその周辺に分布するテフラ (火山灰).「都城市史　資料編　考古」: 609-629. 都城市.
2) テフラの年代は 1) の暦年較正年代を用いている。
3) 都城市教育委員会. 2015.「都城市内遺跡 8」


21
23
20

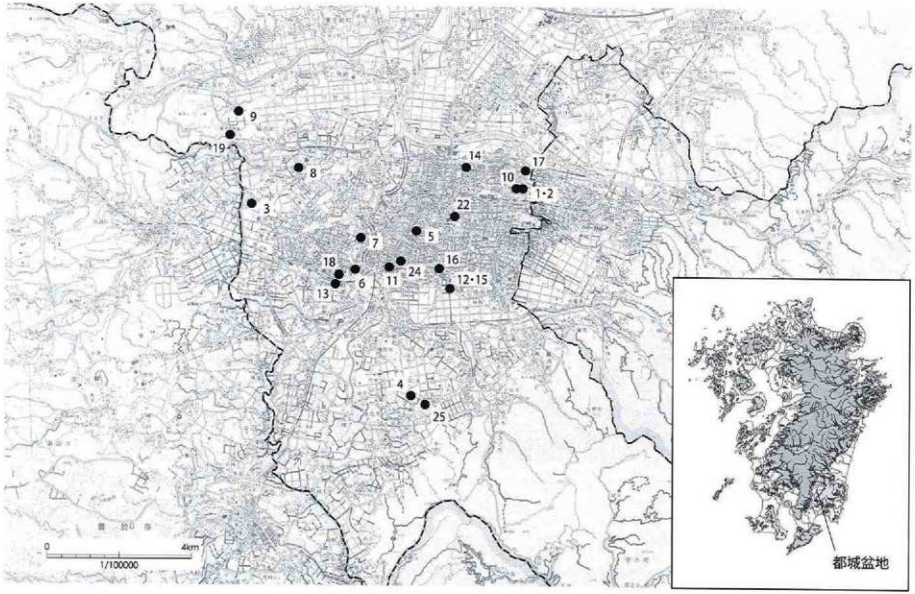


図 1. 試掘・確認調査地点 (No, は表 1 と一致)

表 1. 試掘・確認調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	調査日	主な時代	主な遺構・遺物	備考
1	祝吉第 3 遺跡①	郡元町 3425-3	個人住宅	4/2	なし	なし	
2	祝吉第 3 遺跡②	郡元町 3425-6	個人住宅	4/7	中世	溝状遺構・ピット・土師器	
3	狸穴遺跡	蓑原町 1838-2 ほか	宅地造成	4/13	中世	ピット	
4	梅北北原遺跡	梅北町 1819	農業基盤整備事業（天地返し）	5/1	中世	土師器・陶磁器	
5	中町遺跡	中町 47 ほか	その他開発（公有地処分）	5/23	なし	なし	
6	都城跡	都島町 164-2 ほか	その他開発（公有地処分）	5/29	中世	土師器・陶磁器	
7	上ノ村第 2 遺跡	鷹尾一丁目 3604-4	その他建物（福祉施設）	6/23	中世・近世	溝状遺構・土坑・ピット・土師器・陶磁器	
8	田谷・尻枝遺跡	南横市町 3921-1 ほか	宅地造成	7/7	弥生	土器小片	
9	中牧遺跡	関之尾町 4761	個人住宅	7/23	なし	なし	
10	祝吉第 3 遺跡③	郡元町 3417-1	その他開発（太陽光発電施設）	7/29	中世	ピット・土師器	
11	都城領主館跡	姫城町 3883-2	個人住宅	8/10	近世	溝状遺構・土師器	
12	高田遺跡	早鈴町 2103 ほか	その他建物（店舗・事務所等）	8/26 - 27	中世	水田跡・木製品	
13	八幡城遺跡	南鷹尾町 612-1	個人住宅	10/7	中世	竪穴状遺構・ピット・陶磁器	
14	祝吉遺跡	祝吉二丁目 4-1	宅地造成	10/16	なし	なし	
15	高田遺跡	早鈴町 2103 ほか	その他建物（店舗・事務所等）	10/19 - 21	中世	土師器・陶磁器	工事立会
16	上ノ園第 1 遺跡	早鈴町 1743-3 ほか	集合住宅	10/22	古代	溝状遺構・ピット・土師器・須恵器	
17	村ノ前遺跡	郡元町 2833	宅地造成	10/26	中世	溝状遺構・土師器	
18	都城跡	南鷹尾町 583-1	史跡範囲確認	11/19 - 12/8	中世・近世	溝状遺構・鍛冶遺構・土師器・陶磁器	
19	母智丘原第 2 遺跡	横市町 6644-4	その他建物（福祉施設）	12/17	古墳	土器小片	
20	中大五郎第 2 遺跡	丸谷町 3370-1 ほか	工場	12/18	なし	なし	
21	木ノ下遺跡	高城町有水 3356-4	個人住宅	12/25	縄文	石器	
22	年見川遺跡	北原町 1710 ほか	宅地造成	1/5 - 6	なし	なし	
23	岩瀬王子原遺跡	岩瀬町 324-1	その他建物（車庫・倉庫）	1/25	なし	なし	
24	都城領主館跡③	姫城町 11-1 ほか	個人住宅	2/15	近世	溝状遺構・ピット・陶磁器	
25	梅北北原遺跡（第 2 次調査）	梅北町 1781-4 市道上	その他建物（耐震性貯水槽）	2015/2/5 - 10	弥生・古代・中世	竪穴状遺構・ピット・弥生土器・土師器・陶磁器	工事立会

2. 祝吉第３遺跡①・②

所 在 地	郡元町 3425-3・6	調査面積	2㎡ / 3㎡
調査原因	個人住宅	担 当 者	近沢恒典・早瀬航
調査期間	2015.4.2 / 4.7	調査後の措置	現状保存 (一部記録保存)

位置と環境　開発予定地は盆地底南部に広がる開析扇状地面（一万城扇状地）の北縁域に位置している。現況は宅地である。開発予定地のある分譲地は、2013 年に行った宅地造成に伴う確認調査により、遺跡の存在が確認された。同年、取り付け道路部分の発掘調査が実施され、中世の掘立柱建物跡や溝状遺構等が確認されている[1]。また、周辺域では宅地造成や公園整備等を起因とする確認調査を数地点で実施しており、密度は薄いながらも中世の遺跡の広がりが確認されている。

調査の結果　浄化槽設置部分にトレンチ１箇所を設定し、人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

基本的な層序は現表土・造成土（1 層）、旧耕作土（2 層）、黒褐色土（3・5 層）、霧島御池軽石漸移層（6 層）である。いずれも霧島御池軽石漸移層（6 層）上面にて遺構検出を行った。

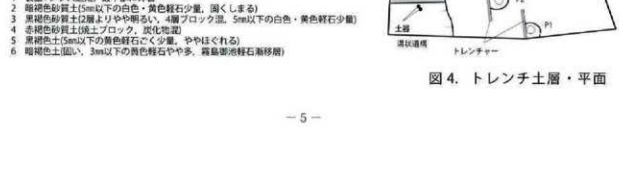
1T では遺構・遺物の出土は確認されなかった。2T ではピット２基・溝状遺構１条が検出された。ピット２からは中世土師器小皿１点 (1) が出土している。溝状遺構の長軸は南北方向と推測された。埋土中より中世土師器片が出土している。

1) 都城市教育委員会. 2015.「祝吉第３遺跡（第２次調査）」

図 1. 調査区位置

図 2. トレンチ配置

図 3. 出土遺物



1 表土+シラス造成. 最下部に砕石
2 暗褐色砂質土(5mm以下の白色・黄色軽石少量, 固くしまる)
3 黒褐色砂質土(2層よりやや明るい, 4層ブロック混, 5mm以下の白色・黄色軽石少量)
4 赤褐色砂質土(焼土ブロック, 炭化炭混)
5 黒褐色土(5mm以下の黄色軽石ごく少量, ややほぐれる)
6 暗褐色土(固い, 3mm以下の黄色軽石やや多, 霧島御池軽石漸移層)

図 4. トレンチ土層・平面

3. 狸穴遺跡

所 在 地	蓑原町 1838-2 ほか	調査面積	28㎡
調査原因	宅地造成	担 当 者	近沢恒典・早瀬航
調査期間	2015.4.13	調査後の措置	協議中

位置と環境 開発予定地は、横市川と大淀川にはさまれた成層シラス台地面(蓑原台地)の北縁部に位置している。現況は宅地及び山林(竹藪)である。周辺では宅地造成に伴う確認調査が数地点で実施されており、その半数程度で遺跡の存在が確認されている。

調査の結果 トレンチ4箇所を設定し、重機にて表土を除去したのち、人力で掘り下げを行い、地下の状況を確認した。1Tではピット1基が検出されたため、トレンチを拡張した。

基本的な層序は表土(1層)・桜島文明軽石(2層)・黒褐色土～暗褐色土(3～5層)・霧島御池軽石漸移層(6層)である。遺構確認は6層上面にて実施した。竹根による攪乱が進んでいた。

いずれのトレンチも遺物の出土はなく、遺構は1Tでピット1基が確認されたのみであった。ピットからは軽石が出土し、埋土の状況からは中世の可能性が考えられた。

これらの状況より、開発予定地には密度は薄いものの、中世の遺跡が存在している可能性があると判断された。

図 1. 調査区位置

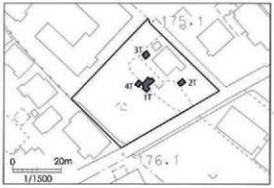


図 2. トレンチ配置

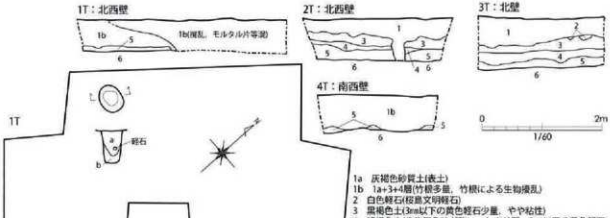


図 3. トレンチ土層・平面

4. 梅北北原遺跡

所 在 地　梅北町 1819
調査原因　土層改良 (天地返し)
調査期間　2015.5.1

調査面積　12㎡
担 当 者　近沢恒典
調査後の措置　現状保存

位置と環境　開発予定地は盆地南部、梅北川右岸に展開するシラス台地・成層シラス台地面(梅北台地)のほぼ中央に位置している。現況は畑地である。周辺域では土層改良事業に伴い数地点で確認調査を実施している。開発予定地の北側隣接地では 2015 年 3 月に実施した確認調査 (以下、2014-⑥と表記) にて、良好な遺跡の存在が確認されている。また、2012 年に西側隣接地で行った確認調査でも古代・中世の遺物が出土している。開発予定地の状況を考える上で重要な情報であるため、2014-⑥の結果を合わせて掲載する。

調査の結果　トレンチ 3 箇所を設定した。重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

いずれのトレンチでも現・旧耕作土 (1 層) の下に桜島文明軽石が混じる層 (2 層) が残り、その下の黒褐色土層 (3 層) より中世土器片 (1・2)・陶磁器片が出土した。霧島御池軽石漸移層 (5 層) 上面にて遺構検

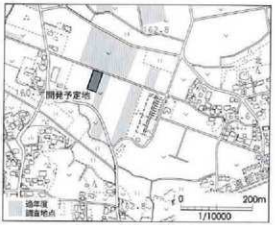


図 1. 調査区位置

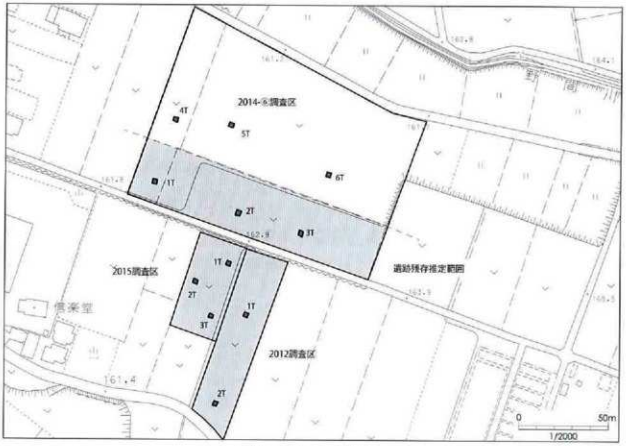


図 2. トレンチ配置

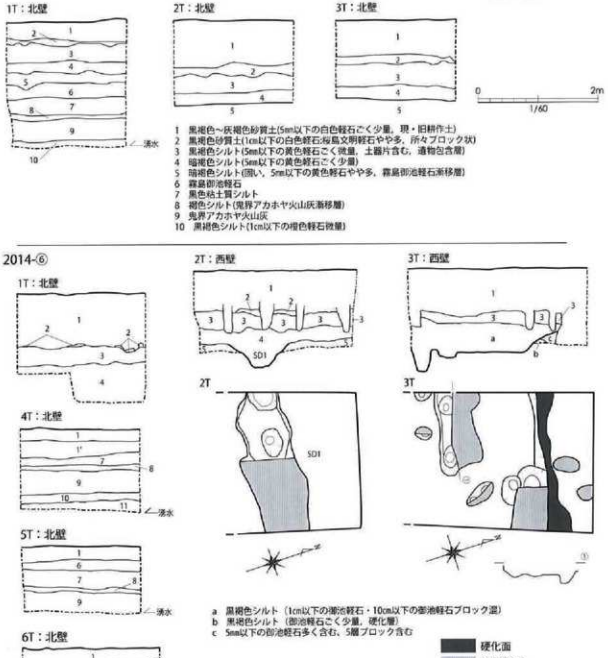


図 3. トレンチ土層・平面

出を実施したが，遺構は確認されなかった。1T では霧島御池軽石層 (6 層) より下位の調査も行ったが，鬼界アカホヤ火山灰層 (9 層) を除去した時点で湧水したため，掘り下げを中止した。

2014-⑥ トレンチ 6 箇所を設定し，重機にて表土を除去。人力にて掘り下げ地下の状況を確認した。

1T では 3 層を中心に中世土師器・陶磁器 (白磁・5) の小片が出土した。2T では底面に浅いピットが構築される溝状遺構 (SD1) が確認された。3T では 5 層上面にて東西方向に延びると考えられる硬化面が検出され，その硬化面の南側を切るように遺構と考えられる落ち込みが形成される。落ち込みの底面からは，ピットが並ぶ浅い溝状遺構やピットが確認された。3・4 層中及び遺構埋土内より中世土師器 (3・4)・陶磁器片が出土している。4T では表土 (1・1' 層) 直下が霧島御池軽石層下の黒色土層 (7 層)、5T では 6 層となっていた。4T・5T のある畑は南側の畑より 1m 程度低く，大幅な削平が想定される。6T では表土直下が上位を削平された 5 層となる。4 ～ 6T では遺構・遺物の出土は確認されなかった。

2012 年調査では設定したトレンチ 2 箇所において、桜島文明軽石と霧島御池軽石漸移層の間の黒褐

色土層(3層?)より古代～中世の土師器片、白磁・青磁片等が出土している。遺構は確認されていない。2Tでは造成土が1.3mと非常に厚く、北側と南側ではかなりの比高差が考えられている。

これらの調査結果より、開発予定地及びその周辺では古代から中世にかけての遺跡が良好な状態で残存している可能性が高いと判断された。

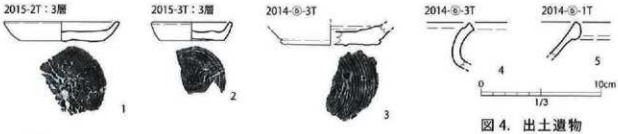


図4. 出土遺物

図版1. 3T(北から)

図版2. 3T：遺物出土状況

図版3 2014-⑥-2T(南から)

図版4. 2014-⑥-3T(北東から)

図版5. 2014-⑥-3T：ピット

図版6. 2014-⑥-4T：北壁

5. 中町遺跡

所 在 地　中町 47　ほか
調査原因　公有地売却
調査期間　2015.5.23

調査面積　8㎡
担 当 者　近沢恒典・早瀬航
調査後の措置　事業実施中

位置と環境　開発予定地は盆地底南部に展開する開析扇状地面（一万城扇状地）のほぼ中央、年見川・柳川原川の合流点のやや西側に位置している。現況は宅地である。周辺域では土地区画整理事業に伴い 1995 年から 2003 年にかけて発掘調査が実施され、縄文時代から近世にかけての遺跡が確認されている[1]。

調査の結果　トレンチ２箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

1・2T 共に 2m 程度の厚い造成土（2 層）が観察された。造成土の下は、1T では水田層と考えられる褐色～暗褐色土（3 ～ 7 層）、2T では上位を削平された霧島御池軽石涌移層（8 層）となる。1T の水田層は遺物の出土がなく正確な時期決定はできないが、造成土直下に位置する層位より、近現代の所産と推定された。

以上の結果より、開発予定地には良好な遺跡が残存している可能性は低いと判断された。

1）都城市、2006.「都城市史　資料編　考古」

図 1.　調査区位置

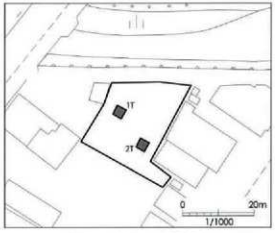


図 2.　トレンチ配置

図版 1.　1T

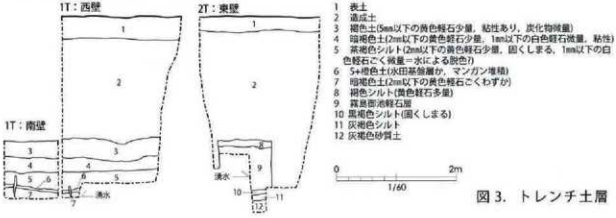


図 3.　トレンチ土層

6. 都城跡

所 在 地	都島町 164-2,164-3 ほか	調査面積	12㎡
調査原因	公有地売却	担 当 者	近沢恒典・早瀬航
調査期間	2015.5.29	調査後の措置	現状保存

位置と環境　開発予定地は盆地南部、大淀川・梅北川・萩原川の合流点のやや北にあり、大淀川左岸の河川氾濫原面に立地している。南の成層シラス台地面には都城盆地における主要城郭「都城」が形成される。近世初頭に描かれた「竹之下都城御城図（都城古絵図）」では、開発予定地と推定される地点に家臣団屋敷が確認できる。現況は更地であり、南→北へわずかに傾斜している。

周辺域は城域を中心に数次にわたる確認調査、記録保存を目的とした発掘調査[1]が実施されている。本開発予定地は 2013 年に確認調査[2]を実施しているが、その際はトレンチ 1 箇所だけの調査であり、状況の把握が不十分であったため、本年度に再度確認調査を実施することとなった。

調査の結果　トレンチ 3 箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

いずれのトレンチでも、1 ～ 1.3 m の造成土 (1 層) と近世～近現代と想定される水田層 (2a ～ 6 層)、その下に褐色～灰褐色土を主体に様々な土が混じる造成土層 (7 ～ 17 層) が確認された。

1T では造成土層中の 12 層レベルより 20㎝程度の軽石塊が多く出土したほか、青磁碗 (1)・中世土師器 (2) も出土している。そのため、造成土 (7 ～ 17 層) の形成は中世期と推測された。いずれのトレンチでも遺構の存在は確認できなかった。

造成土層の下は河川氾濫起源と考えられる砂層・シルト層 (18・19 層) となる。1T では現地表面より 2.8 m、2T では 2.3 m と 18・19 層の検出が深くなっており、南に向かって低くなる旧地形が推定された。

また、2013 年に実施した確認調査トレンチ (2013-7T) では、近世～近現代水田層 (2c1 ～ 2d5 層) の下に造成土層がなく、砂・シルト層 (b ～ 1 層) となる。その要因には、造成土形成後の洪水堆積、2014-7T 付近における東西方向の溝・水路・水堀等の遺構の存在が考えられる。

これらの状況より、開発予定地には、現地表面より 2 m 下に中世の遺物を含む造成土層 (遺物包含層) が良好な状態で存在している可能性が高いと判断された。

図 1. 調査区位置（八巻陵夫 1991[3] を一部改変）

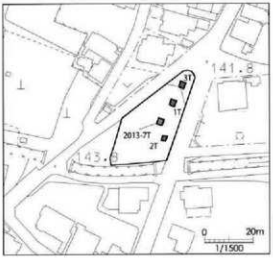
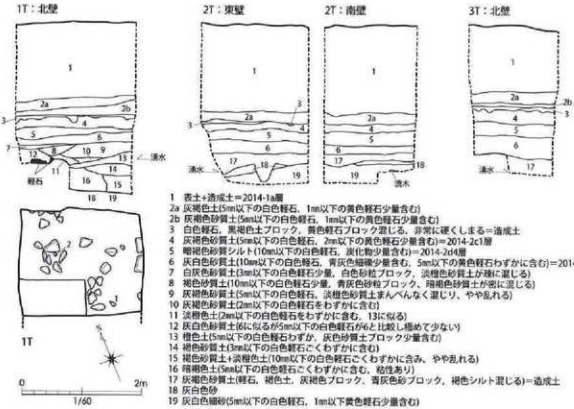


図 2. トレンチ配置

1) 都城市. 2008.「都城市史　資料編　考古」
2) 都城市教育委員会. 2014.「都城市内遺跡 7」
3) 八巻孝夫. 2004.「1. 都城跡」.「都城市の中世城館 (改訂版)」. 15-20. 都城市教育委員会



1　表土+造成土＝2014-1a層
2a　灰褐色土(5mm以下の白色軽石，1mm以下の黄色軽石少量含む)
2b　灰褐色砂質土(5mm以下の白色軽石，1mm以下の黄色軽石少量含む)
3　白色軽石，黒褐色土ブロック，黄色軽石ブロック混じる，非常に硬くしまる＝造成土
4　灰褐色砂質土(5mm以下の白色軽石，2mm以下の黄色軽石少量含む)＝2014-2c1層
5　暗褐色砂質シルト(10mm以下の白色軽石，炭化物少量含む)＝2014-2d4層
6　灰白色砂質土(10mm以下の白色軽石，青灰色細礫少量含む，5mm以下の黄色軽石わずかに含む)＝2014-2d5層
7　白灰色砂質土(3mm以下の白色軽石少量，白色砂粒ブロック，淡褐色砂質土が薄に混じる)
8　褐色砂質土(10mm以下の白色軽石少量，青灰色砂粒ブロック，暗褐色砂質土が密に混じる)
9　灰褐色砂質土(5mm以下の白色軽石，淡橙色砂質土まんべんなく混じり，やや乱れる)
10　灰褐色砂質土(2mm以下の白色軽石をわずかに含む)
11　淡橙色土(2mm以下の白色軽石をわずかに含む，13に似る)
12　灰白色砂質土(6に似るが5mm以下の白色軽石が6と比較し，極めて少ない)
13　橙色土(5mm以下の白色軽石わずか，灰色砂質土ブロック少量含む)
14　褐色砂質土(3mm以下の白色軽石にくわずかに含む)
15　褐色砂質土+淡橙色土(10mm以下の白色軽石にくわずかに含み，やや乱れる)
16　暗褐色土(5mm以下の白色軽石にくわずかに含む，粘性あり)
17　灰褐色砂質土(軽石，褐色土，灰褐色ブロック，青灰色砂ブロック，褐色シルト混じる)＝造成土
18　灰白色砂
19　灰白色細砂(5mm以下の白色軽石，1mm以下黄色軽石少量含む)

図 3．トレンチ土層・平面

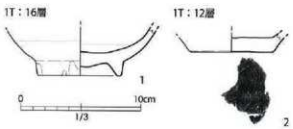


図 4．出土遺物

図版 1．1T：遺物出土状況（南から）

図版 2．1T：遺物出土状況

図版 3．2T：東壁土層

7. 上ノ村第２遺跡

所 在 地　鷹尾一丁目 3604-4 ほか　　調査面積　12㎡
調査原因　福祉施設建設　　担 当 者　近沢恒典・早瀬航
調査期間　2015.6.23　　調査後の措置　協議中

位置と環境　開発予定地は盆地西部、大淀川左岸に展開するシラス台地面（養原台地）の縁辺に形成された河岸段丘面に立地している。現況は宅地である。東に一段下った段丘面には中近世寺院「二厳寺」伝承地があり、墓石等が残る。また西に一段上がった面には県指定史跡・都城古墳（古墳・地下式横穴墓）がある。開発予定地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」外であったが周囲の状況より、遺跡が存在している可能性が考えられたため試掘調査をすることとなった。

調査の結果　トレンチ３箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

1T では表土・造成土（1b 層）の下が上位を削平された鬼界アカホヤ火山灰層（8 層）となり、北→南へと下る大きな傾斜が観察された。桜島 11 火山灰濃集層（12 層）直下の 13 層より礫数点が出土した。集石遺構由来の焼礫の可能性も考えられたが、傾斜が急であるため、流れ込みの可能性が高いと判断した。2T では表土・造成土（1a 層）の下に灰褐色砂質土～黒色土～暗褐色土（2 ～ 5 層）があり、2 層中より近世陶磁器、3 ～ 5 層中より中世土師器小片が出土した。5 層上面にてピット３基、土坑１基（SC1）が検出され、土坑からは軽石加工未成品（1）、中世土師器小片が出土した。3T では表土・造成土（1a 層）の下が，3・4 層を主体としながら褐色砂質土ブロック等が混じる層（アー工層）となる。同層は土質より造成土の可能性も考えられた。上位を削平された霧島御池軽石層（6 層）上面にて、溝状遺構と考えられる落ち込み（SD1）が検出され、SD1 内からは青磁小片が出土した。

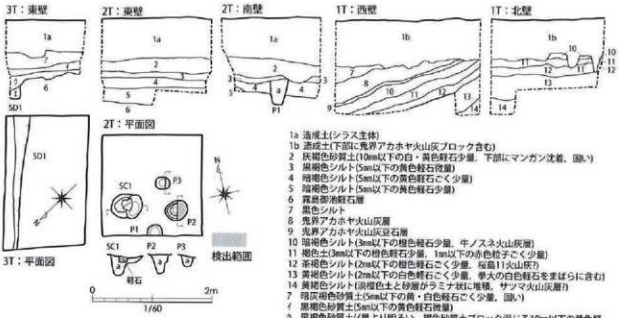
図 1.　調査区位置

図 2.　トレンチ配置

これらの状況より、開発予定地では東側の平坦面を中心とする中世・近世の遺跡が良好な状態で残存している可能性が高いと判断された。この結果に基づき「上ノ村第２遺跡」（集落跡：中世・近世）として新規遺跡の登録を行った。

図版 1.　2T（北から）

図版 2.　SC1：遺物出土状況



1a 造成土(シラス主体)
1b 造成土(下部に鬼界アカホヤ火山灰ブロック含む)
2 灰褐色砂質土(10mm以下の白・黄色軽石少量，下部にマンガン沈着，固い)
3 黒褐色シルト(5mm以下の黄色軽石微量)
4 暗褐色シルト(5mm以下の黄色軽石ごく少量)
5 暗褐色シルト(5mm以下の黄色軽石少量)
6 霧島御池軽石層
7 黒色シルト
8 鬼界アカホヤ火山灰層
9 鬼界アカホヤ火山灰豆石層
10 暗褐色シルト(3mm以下の橙色軽石少量，牛ノスネ火山灰層)
11 褐色土(3mm以下の橙色軽石少量，1mm以下の赤色粒子ごく少量)
12 茶褐色シルト(2mm以下の橙色軽石ごく少量，桜島11火山灰?)
13 黄褐色シルト(2mm以下の白色軽石ごく少量，単大の白色軽石をまばらに含む)
14 黄褐色シルト(淡橙色土と砂層がラミナ状に堆積，サツマ火山灰層?)
7 暗灰褐色砂質土(5mm以下の黄・白色軽石ごく少量，固い)
イ 黒褐色砂質土(5mm以下の黄色軽石微量)
ウ 黒褐色砂質土(イ層より明るい，褐色砂質土ブロック混じる10mm以下の黄色軽石ごく微量，a層とほぼ同じ)
I 黒褐色砂質土(7層+黄色軽石ブロック少量)
a 黒褐色砂質土(5mm以下の黄色軽石少量，褐色砂質土混じる，しまり弱)

図 3. トレンチ土層

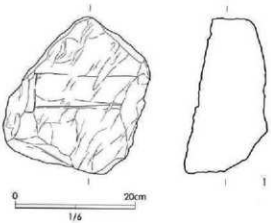


図 4. 出土遺物

図版 3. 3T(北西から)

図版 4. 1T：西壁土層

図版 5. 作業状況

8. 田谷・尻枝遺跡

所 在 地	南横市町 3921-1 ほか	調査面積	28㎡
調査原因	宅地造成	担 当 者	近沢恒典・早瀬航
調査期間	2015.7.7	調査後の措置	慎重工事

位置と環境　開発予定地は都城盆地の南部、横市川右岸に形成される成層シラス台地面（蓑原台地）の縁辺域に立地している。現況は畑地である。当地域は近年宅地化が進行している地域であり、本開発予定地周辺でも数地点で確認調査を実施している。南側に隣接する 2003 年の確認調査では 5T にて弥生時代の竪穴住居跡が検出され、2007 年の確認調査では桜島文明軽石層の直下の黒色土中にて並走する 4 条の硬化面が検出されている。2011 年の確認調査では遺構・遺物の出土は確認されていない。

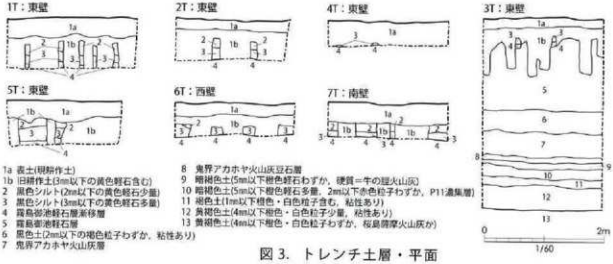
調査の結果　トレンチ 7 箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

7T 以外のトレンチでは牛蒡栽培時の機械深耕（トレンチャー）による攪乱が進行していた。遺物は 5T・7T での小片各 1 点、表採の小片 9 点のみであった。攪乱の少ない 7T でも遺物量が些少なため、包含層の密度は薄いと考えられた。いずれも霧島御池漸移層（4 層）にて遺構確認を行なったが、遺構は検出されなかった。

これらの状況より、開発予定地には南側隣接地からひろがる密度の薄い弥生時代の遺物包含層は存在するもののトレンチャーによる攪乱が進行しており、良好な遺跡の存在する可能性は低いと判断された。

図 1. 調査区位置

図 2. トレンチ配置



1a 表土(現耕作土)
1b 旧畑作土(5mm以下の黄色軽石含む)
2 黒色シルト(2mm以下の黄色軽石少量)
3 黒色シルト(3mm以下の黄色軽石多量)
4 霧島御池軽石層漸移層
5 霧島御池軽石層
6 黒色土(2mm以下の褐色粒子わずか、粘性あり)
7 鬼界アカホヤ火山灰層
8 鬼界アカホヤ火山灰豆石層
9 暗褐色土(5mm以下褐色軽石わずか、硬質＝牛の踵火山灰)
10 暗褐色土(5mm以下橙色軽石多量、2mm以下赤色粒子わずか、P11遺集層)
11 褐色土(1mm以下橙色・白色粒子含む、粘性あり)
12 黄褐色土(4mm以下褐色・白色粒子少量、粘性あり)
13 黄褐色土(4mm以下褐色・白色粒子わずか、桜島薄厚火山灰か)

図 3. トレンチ土層・平面

9. 祝吉第3遺跡③

所 在 地	郡元町 3417-1	調査面積	28㎡
調査原因	太陽光発電施設	担 当 者	近沢恒典・早瀬航
調査期間	2015.7.29	調査後の措置	現状保存

位置と環境 開発予定地は盆地底南部に展開する開析扇状面（一万城扇状地）の北縁部に位置している。現況は畑地である。開発予定地の南に隣接する公園は、県指定史跡「祝吉御所跡」となっている。「祝吉御所」は 1185 年（文治元年）に島津荘惣地頭職として鎌倉から下向した惟宗忠久の館の意である。惟宗忠久とはのちに「島津」を名乗り、島津氏の初代となる人物である。1994 年に実施された公園整備に伴う確認調査では 7T から 10T にかけて東西方向にのびると考えられる道路状遺構のほか、土坑・ピット等が検出されている[1]。

調査の結果 トレンチ 6 箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

いずれのトレンチも現耕作土・旧耕作土（1 層）が厚く堆積し、その下に黒色土（2 層）、霧島御池軽石漸移層（3 層）と続く。

遺物は 5T・2 層にて中世土師器片（1）と青磁片、6T・SX1 埋土内（3 層）より中世土師器片が出土した。5T 出土遺物のレベルは 160.6 ～ 7m と 2 層上位にあたるため、2 層上位が遺物包含層の主体と把握された。しかし、同層位は旧耕作土による攪乱が進行するレベルであり、包含層の残存状況は良好とはいえない。

遺構検出は 3 層上面にて行い、1T・2T・5T・6T にてピット 10 基が確認された。いずれも埋土は 2 層起源と考えられる黒色土である。6T では浅い掘り込み（SX1）が検出され、埋土中より中世土師器片が出土している。

また、5T・2 層上位で遺物が出土したため、その出土レベルでも遺構検出を行なったが、黒色土（2 層）に混じる黄色軽石の濃淡は観察されたものの、明確な遺構は確認できなかった。この黄色軽石の濃淡は土層断面でも 3 層が巻き上げられたような状態で観察される。3 層上面に不規則な凹凸がある点を含め、耕作による攪拌の可能性も考えられる。

これらの状況より、開発予定地には攪乱が進行する遺物包含層と掘立柱建物等からなる中世の遺跡が存在している可能性が高いと判断された。

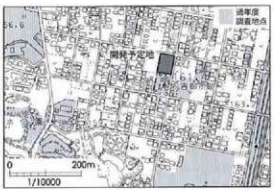


図 1. 調査区位置

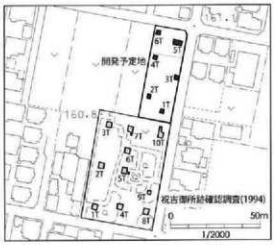


図 2. トレンチ配置

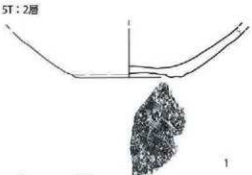
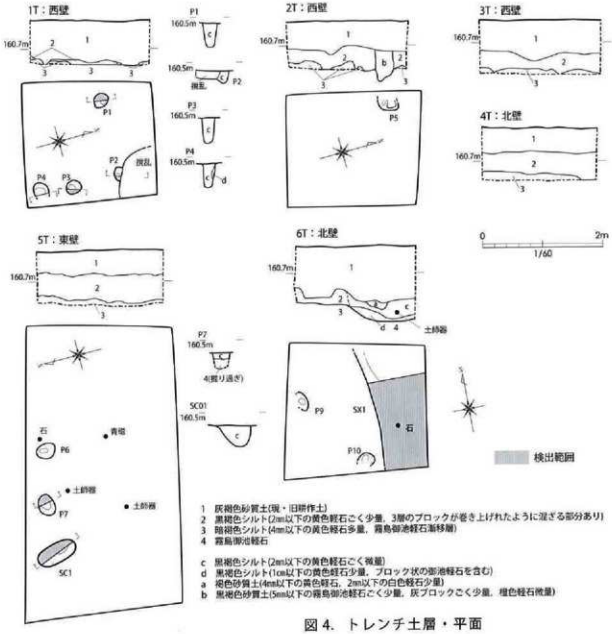


図 3. 出土遺物

1）郡城市. 2006.「郡城市史　資料編　考古」



1　灰褐色砂質土(現・旧耕作土)
2　黒褐色シルト(2m以下の黄色軽石ごく少量，3層のブロックが巻き上げれたように混ざる部分あり)
3　暗褐色シルト(4m以下の黄色軽石多量，霧島御池軽石漸移層)
4　霧島御池軽石

c　黒褐色シルト(2m以下の黄色軽石ごく微量)
d　黒褐色シルト(1cm以下の黄色軽石少量，ブロック状の御池軽石を含む)
a　褐色砂質土(4mm以下の黄色軽石，2mm以下の白色軽石少量)
b　黒褐色砂質土(5mm以下の霧島御池軽石ごく少量，灰ブロックごく少量，橙色軽石微量)

図 4.　トレンチ土層・平面

図版 1.　5T：(南から)

図版 2.　6T：北壁土層

10. 都城領主館跡

所 在 地	姫城町 3883-2	調査面積	6㎡
調査原因	個人住宅	担 当 者	栗山葉子
調査期間	2015.8.10	調査後の措置	工事立会

位置と環境　開発予定地は盆地底南部に展開する開析扇状地面（一万城扇状地）の西端に位置し、姫城川による開析谷に面した段丘面の縁辺部に立地している。現況は宅地である。「都城領主館」は近世都城の統治機関であるが、明治以後は都城県庁、都城市役所など行政の中心となる一方、宅地化も進行し様相の解明は進んでいない。周辺域の調査には北の明道小学校にて近世～近代の遺構の一部が確認された[1]ほか、その北に位置する都城家庭裁判所建替えに伴い宮崎県埋蔵文化財センターが実施した調査にて近世屋敷跡が確認されている[2]。

調査の結果　トレンチ２箇所を設定し、人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

1Tでは鬼界アカホヤ火山灰ブロックを含む近世以降の盛土（2層）および桜島文明軽石を多く含む砂質シルト土（3・4層）から掘りこまれたと考えられる溝状遺構の端部が確認された。また、黒灰色土（5層）より底部糸切離しの中世土師器小片が１点が出土した。

2Tでは遺構・遺物の出土は確認されていない。

これらの状況より、開発予定地の西端において、南北方向に伸びる溝状遺構等の遺構が良好な状態で残存していると判断された。

1）都城市教育委員会、2015.「都城市内遺跡 8」
2）宮崎県埋蔵文化財センター、2003.「八幡遺跡」

図 1. 調査区位置

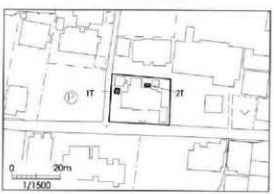
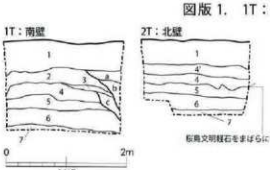


図 2. トレンチ配置

図版 1. 1T：北壁土層



1　灰褐色砂質土(15cm以下の礫含む，表土)
2　暗褐色砂質シルト(5cm以下のアカホヤブロック含む，近世以降の盛り土)
3　黒褐色砂質シルト(10cm以下の黄色軽石さくわずか)
4　灰褐色砂質シルト(10cm以下の文明軽石多量，近世)
4'　bに似る
5　黒灰色シルト(10cm以下の白色軽石，5cm以下の黄色パミス微量)
6　黒色シルト(5cm以下の黄色軽石多多量)
7　暗褐色シルト(10cm以下の黄色パミスきわめて多く含む)
a　灰オリーブ砂質シルト(黄・白色パミス多量)
b　灰色砂質シルト(黄・白色パミス含む)
c　暗灰色砂質シルト(4層をブロック状に含む，黄・白色パミス多量)

図 3. トレンチ土層・平面

11. 高田遺跡①・②

所 在 地　早鈴町 2103 ほか
調査原因　店舗・事務所・倉庫建設
調査期間　2015.8.26-27 / 10.19-21

調査面積　60㎡ / 430㎡
担 当 者　近沢恒典・早瀬航
調査後の措置　工事立会

位置と環境　開発予定地は盆地底南部にひろがる開析扇状地面（一万城扇状地）の南端に立地している。現況は水田である。北東に隣接するイオンショッピングセンター都城店建設に伴う発掘調査（2002 年調査区）では、中世水田及び弥生時代の集落が確認されている[1]。

調査の結果　トレンチ 6 箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。2 ～ 4T は 1m 程度の造成土があり、掘削深度が深くなったため 2 段掘りを行っている。

基本的な層序は造成土・旧耕作土（近世～近現代・1・2・4 層）、桜島文明軽石とそれを伴う耕作土層（畠跡・中世・5・6 層）、腐食した草木を含む黒色～灰色シルト層（7 ～ 11 層）、砂が混じるシルト層（12 ～ 18 層）、砂礫層（19 層）に大別される。トレンチごとに堆積状

1）都城市教育委員会．2005．「高田遺跡」

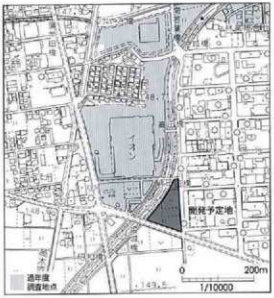


図 1．調査区位置

図 2．確認調査トレンチ配置

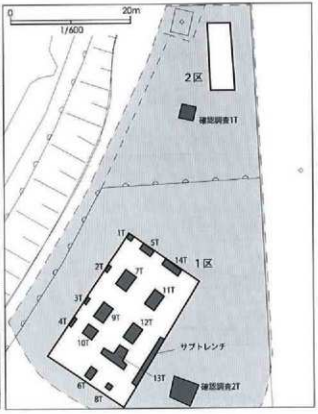
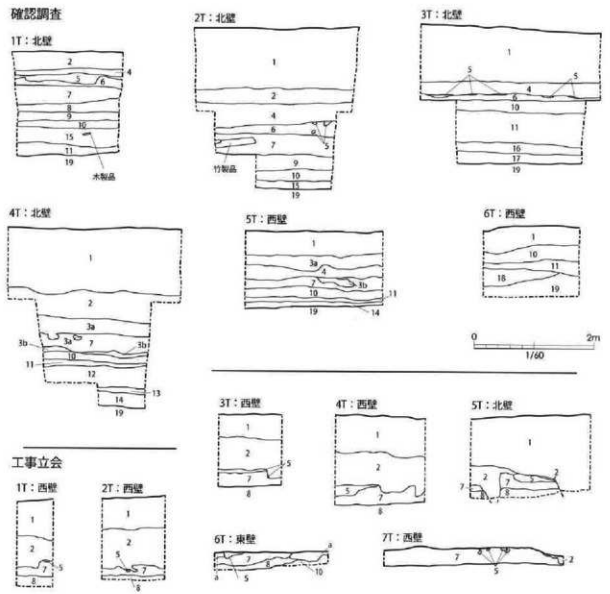


図 3．工事立会トレンチ配置



1　造成土
2　表土(報告書Ⅰ層)
3a　黄色軽石+灰色砂の混層(5mm以下の黄色軽石)
3b　3aに植物繊維含み、色調が暗い
4　灰褐色砂質土(2mm以下の白・黄色軽石微量)
5　桜島文明軽石層(報告書Ⅲ層)
6　黒褐色土(やや粘質、報告書Ⅳ層)
7　黒褐色シルト(粘質、植物遺体微量、腐植土)
8　暗灰褐色シルト(粘質、植物遺体多量、腐植土)
9　明灰褐色シルト(粘質、植物遺体少量、腐植土、褐色シルトブロック混じる)
10　灰褐色シルト(粘質、植物遺体少量、腐植土)
11　灰色シルト(粘質、植物遺体ごく少量、腐植土)
12　灰色砂
13　灰色砂質シルト(植物遺体少量)
14　褐灰色砂(ラミナ状堆積)
15　灰色シルト+白色砂(青灰色砂ブロックわずか)
16　黄褐色砂(5cm以下の礫多く含む)
17　青灰色砂質シルト(砂層がラミナ状に入る)
18　褐色・灰白・黄褐色砂の混層
19　明灰褐色砂(5cm以下の礫多く含む、砂礫層)
20　灰色砂質土(5cm以下の礫多く含む)
a　桜島文明軽石+白灰色砂のラミナ状堆積

図3. トレンチ土層

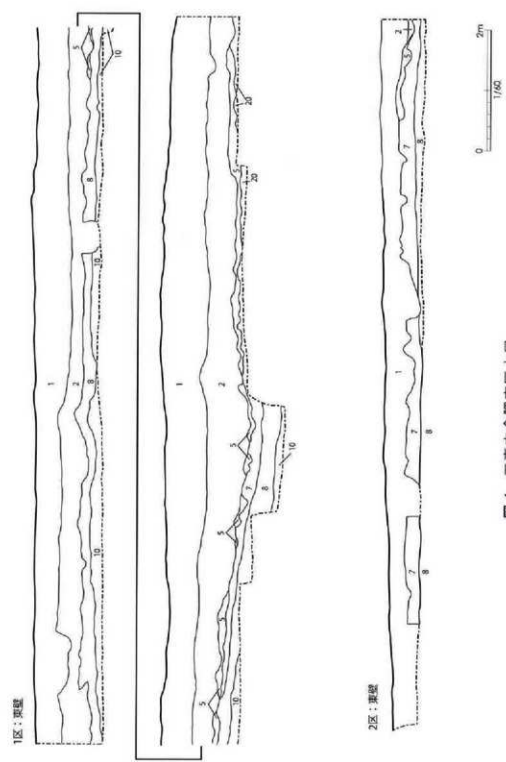


図 4. 工事立会調査区土層

況が異なっており、桜島文明軽石とそれを伴う耕作土層は 1 ～ 3T、腐食した草木を含む黒色～灰色シルト層は 1・2・4・5T でのみ検出されている。

遺構は中世畠跡と考えられる層 (6 層) が検出された。削平が進み状態は良くない。2002 年調査区から続く畠と考えられる。遺物は 1T・15 層より木材加工品、2T・4 層より竹筒が出土した。木材加工品の出土層は洪水堆積層であり流れ込みと判断される。2T の竹筒は内部の節が除去されており、強湿田における排水用の樋管と考えられた。層位より近世の所産と考えられた。

これらの状況より、開発予定地の北側の一部には、削平の進む中世期の畠跡を主体とする遺跡が残存している可能性が高いと判断された。また土層の観察等より、開発予定地は 2002 年調査区の立地する

微高地の周囲に形成された低湿地域であり、南に位置する萩原川の氾濫の影響も大きく、明確な土地利用は中世期からと考えられた。

工事立会　本開発では平成27年8月27日付で事業者より宮崎県教育長へ文化財保護法第93条第1項に基づく届出がなされ、9月4日付0850-7-114にて宮崎県教育長より事業者へ施工時の工事立会が通知された。これに基づき都城市教育委員会は10月19日から21日にかけて、遺跡残存推定範囲内の構造物建設部分において工事立会を行った。その工程は2～3層までの掘削と柱設置(地盤改良)部分における5層以下までの掘削工事である。1区は建物建設予定地、2区は貯水槽設置予定地である。

1区・2区共に2～3層まで事業者が掘削を行ったあと、5・6層上面にて遺構検出を行なった。撹乱や河川氾濫などの影響が大きく、中世水田の区画等を検出することはできなかった。

1区の柱設置(地盤改良)部分にはトレンチ14本を設置し、人力にて5層以下の掘り下げを行なった。弥生土器片のほか中世土師器片、陶磁器片が出土したが、遺構は確認されなかった。

図版1.　全景(北西から)

図版2.　1T(南から)

図版3　3T(南から)

図版4.　工事立会：1区北側(東から)

図版5.　工事立会：8T(南から)

図版6.　工事立会：11T(南から)

12. 八幡城遺跡

所 在 地　南鷹尾町 612-1
調査原因　個人住宅
調査期間　2015.10.7

調査面積　20㎡
担 当 者　近沢恒典
調査後の措置　工事立会

位置と環境　開発予定地は盆地南西部にひろがる成層シラス台地面（養原台地）の東縁辺部に立地している。現況は畑地である。東側には都城盆地の主要城郭である「都城」が展開しており、堀を挟み中尾城（曲輪）に隣接する。また、JR 日豊本線中尾踏み切り付近は都城の大手口に比定されている。踏み切りより南西へ伸びる市道では拡幅工事に伴う発掘調査にて、中世～近世初頭の道路状遺構・溝状遺構・掘立柱建物跡・竪穴状遺構が検出されている[1]。

調査の結果　トレンチ 3 箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。2T では竪穴状遺構を検出したためトレンチを拡張した。

基本的な層序は現耕作土（1 層）、桜島文明軽石が混じる層（2・3 層）、黒色シルト（4 層）、黒褐色シルト（5 層）、霧島御池軽石層（6・7 層）となる。1・2T では現耕作土（1 層）直下が霧島御池軽石（7 層）となっていたが、3T では 2～5 層が残存しており、5 層より中世陶磁器が出土した。そのため 5 層を中世の遺物包含層と判断した。

いずれのトレンチでも 6 層もしくは 7 層上面にて遺構検出をおこなった。1T・2T では牛蒡栽培時の機械深耕（トレンチャー）による撹乱を受けているものの、ピット・竪穴状遺構（SX01・02）が確認された。2T の竪穴状遺構は土坑と考えられる黒色土（SC01）と SX01・02 が重複しており、土層断面の観察からは SC01 → SX01 → SX02 の構築と把握された。SX01 は長軸 3.4m、短軸 2.5m の端正な長方形の平面形しており、検出面からの深さは 0.9m であった。床面では壁に沿ってピットがめぐる。3T では遺構は確認されなかった。

これらの状況より、開発予定地には遺物包含層となる 5 層の削平が進むものの、ピットや竪穴状遺構などの遺構が良好な状態で残存している可能性が高いと判断された。

また、11 月 10 日に実施した土地境界ブロック塀設置に伴う工事立会では、7 層上面にてピット 2 基、竪穴状遺構もしくは土坑の可能性のある黒色土の範囲が確認された。

図 1. 調査区位置（八巻隆夫 1991[1] を一部改変）

図 2. トレンチ配置

図版 1.　1T：検出（南から）

1) 八巻孝夫. 2004.「1. 都城跡」.「都城市の中世城館（改訂版）」. 15-20. 都城市教育委員会
2) 都城市教育委員会. 2009.「八幡城遺跡」

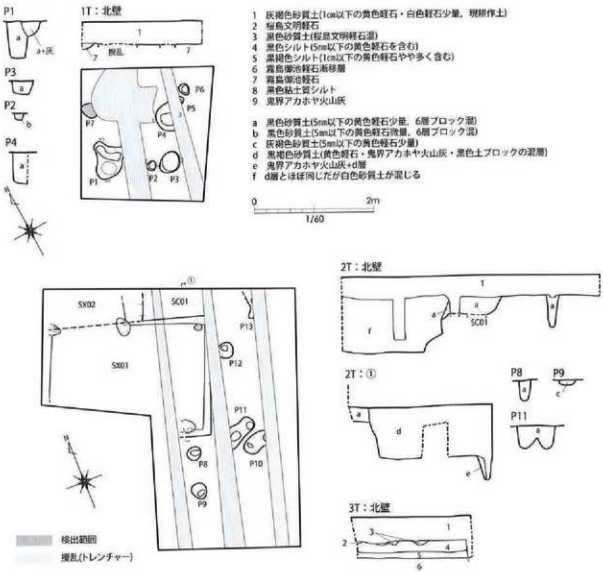


図 3. トレンチ土層・平面

図版 2. 2T：検出 (西から)

図版 3. 2T：SX01.02(西から)

13. 上ノ園第 1 遺跡

所 在 地	早鈴町 1747-3・1749-1	調査面積	12㎡
調査原因	アパート建設	担 当 者	近沢恒典
調査期間	2015.10.22	調査後の措置	工事立会

位置と環境　開発予定地は盆地底南部に展開する開析扇状地面（一万城扇状地）のほぼ中央に位置し、姫城川による開析谷に面した縁辺部に立地している。現況は宅地である。周辺域では東に約 200m の宮田遺跡では 2005 年に実施された発掘調査で弥生時代から中世にかけての水田跡が確認されている[1]。東に約 600m の上ノ園第 2 遺跡では 1993 年に実施された発掘調査にて弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡、古代掘立柱建物群と溝状遺構・道路状遺構等が確認され、多量の古代須恵器とともに「秦」字の墨書土器等が出土している[2]。

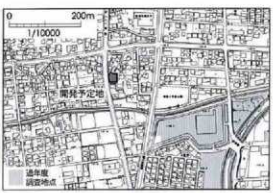


図 1. 調査区位置

調査の結果　トレンチ 4 箇所を設定し、人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

いずれのトレンチも表土・造成土（1 層）の下に黒色土（2 層）があり、霧島御池軽石層（3・4 層）と続く。3 層もしくは 4 層にて遺構検出を実施した。

遺物は 2 層より古代土師器片 (1)・須恵器片が出土しており、2 層を古代期の遺物包含層と把握した。

遺構は 1T にてピット 11 基が検出された。3T では 2 層直下が上位を削平された 4 層となっていたが、東壁にかかる形で溝状遺構と考えられる落込み (SD01) が確認された。内部より古代土師器片 (2・3) が出土している。4T ではトレンチの東南隅にて遺構と考えられる落ち込み (SX01) を確認した。

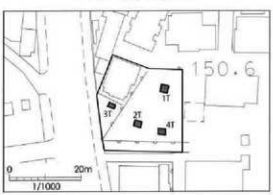


図 2. トレンチ配置

これらの状況より、開発予定地には古代を主体とする遺跡が残存している可能性が高いと判断された。また、上ノ園第 2 遺跡の存在を考えると調査区周辺（一万城扇状地南縁）における古代期の遺跡の広がりが想定される。

1) 都城市教育委員会. 2006.「岩吉田遺跡　宮田遺跡」
2) 都城市教育委員会. 1994.「上ノ園第 2 遺跡」

図版 1.　作業状況

図版 2.　1T：遺物出土状況

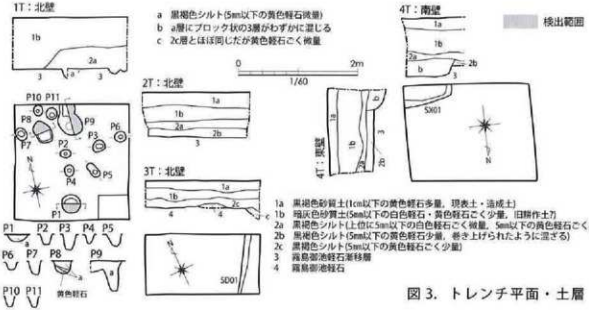


図 3. トレンチ平面・土層

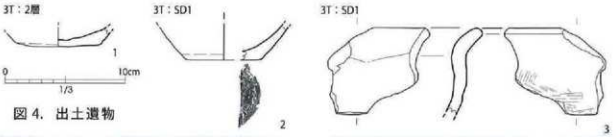


図 4. 出土遺物

図版 3. 1T：検出状況（南西から）

図版 4. 1T(南西から)

図版 5. 3T：検出状況（西から）

図版 6. 4T(南西から)

14. 村ノ前遺跡

所 在 地	都元町 2833	調査面積	13㎡
調査原因	宅地造成	担 当 者	近沢恒典
調査期間	2015.10.26	調査後の措置	現状保存

位置と環境　開発予定地は盆地底南部に展開する開析扇状地面（一万城扇状地）の北縁部に位置している。現況は宅地である。東側隣接地は宅地造成に伴い1998年（1～5T）、2012年（6T～8T）に確認調査が実施され、1・2Tではピット、5Tでは近世の溝状遺構が検出され、多くのトレンチより中世土師器、青磁、白磁等が出土している。なお、今回の開発予定地と東側隣接地とでは東側隣接地のほうが高く、1.5m程度の比高差がある。

調査の結果　トレンチ5箇所を設定し、人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

いずれのトレンチでも表土・造成土（1層）の下に黒色土（2・3層）があり、霧島御池軽石層（4層）と続く。4層にて遺構検出を実施したが、攪乱及び植物根と考えられる生物擾乱が進行しており、4層上面の状態は不安定となっていた。

1T・2Tでは大規模な攪乱が確認された。3Tでは3層より中世土師器片（1）が出土し、東西方向にのびる溝状遺構が確認された。4Tは3T東側に位置する。南側にて浅い落ち込みが検出された。3Tから続く溝状遺構の可能性がある。このほかにピット1基が検出された。5Tでは遺構・遺物の出土は確認されなかった。

これらの状況より、開発予定地の一部には中世を主体とする遺跡が残存している可能性が高いと判断された。

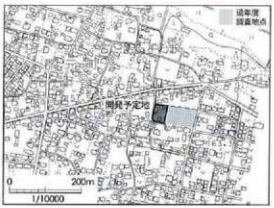


図1. 調査区位置

図2. トレンチ配置

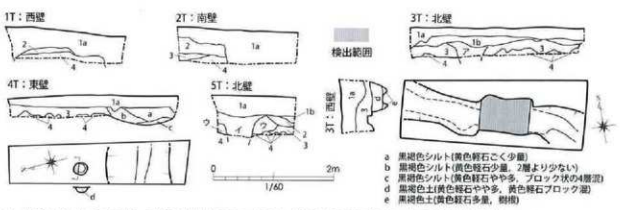


図3. トレンチ土層・平面

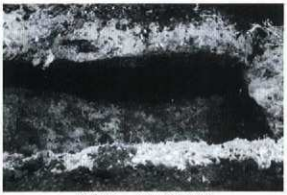
図 4.　出土遺物

図版 1.　1T(南から)

図版 2.　2T(南から)

図版 3.　3T(南から)

図版 4　3T：SD01 内遺物



図版 5.　4T：SD01(?)

図版 5.　5T(南から)

図版 7.　全景 (西から・奥は 1998・2012 調査区)

15. 母智丘原第２遺跡

所 在 地	横市町 6644-4	調査面積	16㎡
調査原因	福祉施設建設	担 当 者	近沢恒典
調査期間	2015.12.17	調査後の措置	協議中

位置と環境　開発予定地は盆地南西部に展開する成層シラス台地面（月野原台地）の南西端部に位置している。現況は更地となっている。北側隣接地は、農業試験場職員宿舎建設に伴い、宮崎県埋蔵文化財センターにより、1998 年に発掘調査が実施されている。古墳時代の竪穴住居跡１棟が確認されている[1]。

調査の結果　トレンチ３箇所を設定し、重機にて表土を除去したのち、人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

基本的な層序は表土（1 層）、桜島文明軽石が混じる黒褐色土層（2 層）、黒褐色～暗褐色土層（3a・b 層）、黒褐色シルト（4 層）、霧島御池軽石層（5 層）となる。

いずれのトレンチでも２層より数点の土器片が出土しており、２層が遺物包含層と把握される。1998 年調査で住居跡が確認された３層上面と５層上面で遺構検出を実施したが、明確な遺構を確認することはできなかった。また、3・4 層を中心に植物と考えられる生物擾乱が進行し、5 層上面は非常に不安定な状態となっていた。土層の様相からは耕作の可能性も考えられたが、明確な畝状遺構等を観察することはできなかった。

これらの状況より、開発予定地には密度の薄い遺物包含層は残るものの、竪穴住居跡等の遺構が存在している可能性は低いと判断された。

1）宮崎県埋蔵文化財センター、2002.「母智丘原第２遺跡　畑田遺跡　塚原遺跡」

図 1. 調査区位置

図 2. トレンチ配置

図版 1. 1T：5 層上面（南から）

1　灰褐色砂質土（表土）
2　黒褐色砂質土（1cm以下の白色軽石少量、固い）
3a　黒褐色シルト（5mm以下の黄色軽石こく微量）
3b　暗褐色シルト（5mm以下の黄色軽石少量）
4　黒褐色シルト（1cm以下の黄色軽石やや多）
5　黄色軽石（霧島御池軽石）

図 3. トレンチ土層・平面

16. 中大五郎第２遺跡

所 在 地	丸谷町 3370-1 ほか	調査面積	18㎡
調査原因	工場建設	担 当 者	近沢恒典
調査期間	2015.12.18	調査後の措置	慎重工事

位置と環境　開発予定地は盆地北西部、丸谷川右岸に展開する河岸段丘面（丸谷川段丘群）に立地している。以前は鶏舎があったとされる。現況は更地となっている。北側には「ほ場整備事業」に伴って 1991 年に実施された発掘調査地点がある。1991 年調査では弥生時代～古墳時代の集落、中世の掘立柱建物群が確認されている[1]。

調査の結果　トレンチ４箇所を設定し、重機にて表土を除去したのち、人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

基本的な層序は表土・撹乱（1 層）、黒褐色土層（2・3 層）、霧島御池軽石層（3 層）となる。

いずれのトレンチでも深さが 0.8 ～ 2 mに及ぶ大規模な撹乱が確認された。遺物は出土していない。2・3 層以下が残存していた 1・4T では、4 層上面で遺構検出を実施したが、明確な遺構の存在は確認できなかった。また、4 層のレベルが 2T → 4T → 1T へ徐々に深くなる点からは、南から北へ傾斜する旧地形が推測された。

これらの状況より開発予定地において良好な遺跡が存在している可能性は低いと判断され、開発予定地は上位の扇状地面から河川に面した 1991 年調査区へと下る斜面上に位置していると考えられた。

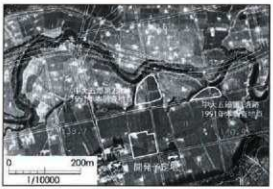
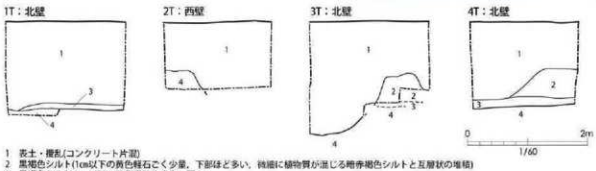


図 1. 調査区位置　※背景は 1947 年米軍撮影空中写真（国土地理院所管の写真を使用）

図 2. トレンチ配置

図版 1.　1T（南から）



1　表土・撹乱（コンクリート片混）
2　黒褐色シルト（1cm以下の黄色軽石ごく少量、下部ほど多い、微細に植物質が混じる暗赤褐色シルトと互層状の堆積）
3　黒褐色シルト（3cm以下の黄色軽石やや多、固い）
4　黄色軽石（霧島御池軽石）

図 3. トレンチ土層

1）都城市教育委員会、1996.『丸谷地区遺跡群』

17. 木ノ下遺跡

所 在 地	高城町有水 3356-4	調査面積	2㎡
調査原因	個人住宅	担 当 者	近沢恒典
調査期間	2015.12.25	調査後の措置	現状保存（一部記録保存）

位置と環境　開発予定地は盆地の北部、大淀川と有水川に囲まれたシラス台地・成層シラス台地群の南縁に位置し、南に有水川を望む段丘面に立地している。開発予定地では 2012 年に公有地売却に伴い確認調査を実施し縄文時代早期の遺跡の存在が確認されている。開発予定地の状況を考える上で重要な情報であるため、2012 年調査結果を合わせて掲載する。

また、開発予定地より北に 100m 程度の有水保育所では園舎建設に伴って発掘調査が実施され、縄文時代早期の集石遺構等が確認されている。

調査の結果　浄化槽設置部分にトレンチ 1 本を設定し、人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

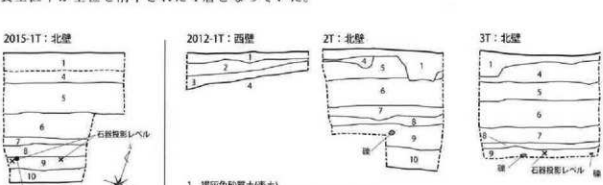
基本的な層序は表土 (1 層)、黒色土層 (2 層)、霧島御池軽石 (3・4 層)、黒色土層 (5 層)、鬼界アカホヤ火山灰層 (6 層)、桜島 11 火山灰濃集層 (8 層)、灰オリーブ色土層 (9 層)、褐色土層 (10 層) となる。

1T では表土直下が上位を削平された 4 層となっていた。6 層上面では遺構の存在は確認できなかった。9 層より赤化した礫、敲打痕のある石 (7)、石鏃の未成品と考えられる黒曜石 (6) が出土した。

2012 年調査　トレンチ 3 箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。2T・3T では表土直下が上位を削平された 4 層となっていた。

図 1. 調査区位置

図 2. トレンチ配置



1　褐灰色砂質土(表土)
2　黒色シルト(0.5cm以下の黄色軽石粒を含む)
3　暗褐色シルト(1cm以下の黄色軽石粒を多く含む)
4　霧島御池軽石
5　黒色粘質シルト(0.1cm以下の赤褐色粒を所々含む)
6　黄橙色火山灰(鬼界アカホヤ火山灰、下部に0.5cm以下の火山豆石を含む)
7　灰褐色シルト(0.5cm以下の黄橙色軽石粒・赤褐色粒をわずかに含む)
8　暗褐色～灰オリーブ色シルト(1cm以下の黄色軽石・赤褐色粒を極多く含む、桜島11火山灰濃集層)
9　灰オリーブシルト(1cm以下の黄色軽石・赤褐色粒をわずかに含む)
10　褐色シルト(1cm以下の軽石粒をわずかに含む、5cm程度の褐色ブロックを含む)
11　明褐色砂質土

図 3. トレンチ土層

1Tでは2・3層が残存していたが遺構・遺物の出土は確認されなかった。4層より下位を調査した2T・3Tでは、縄文時代早期土器片(下剥峰式・1/塞ノ神式2・3)、石鏃未製品と考えられる黒曜石(4・5)、赤化した礫等が出土した。

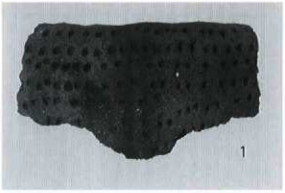
これらの点に有水保育所における調査結果を合わせると、周辺域(有水川に面した段丘面)における縄文時代早期の遺跡の展開が想定された。

図4. 出土遺物

図版1　1T(南から)

図版2　1T：遺物出土状況

図版3.　2012-3T(南から)



図版4.　出土遺物

18. 年見川遺跡

所 在 地	北原町 1710 番ほか	調査面積	28㎡
調査原因	宅地造成	担 当 者	近沢恒典
調査期間	2016.1.5-6	調査後の措置	慎重工事

位置と環境 開発予定地は盆地底南部にひろがる開析扇状地面（一万城扇状地）のほぼ中央に位置し、年見川にそった河川氾濫原面に立地している。現況は水田である。周辺域では昭和 40 年代に遊動公園を整備した際、多数の弥生土器片等が採集されている。

調査の結果 トレンチ 7 箇所を設定し、重機にて表土を除去したのち、人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

基本的な層序は現耕作土 (1 層)、造成土 (1a ～ d 層)、旧耕作土と造成土 (2a ～ f 層)、攪乱層 (3 層)、シルト・砂・砂礫層 (5 ～ 8 層) に大別される。

多くのトレンチ (3 ～ 7T) では現耕作土 (1 層)、造成土 (1a ～ d 層)、砂層・砂礫層 (6 ～ 8 層) となっていたが、2T でのみ 90cm 程度の厚い旧耕作土・造成土 (2a ～ f 層) が観察された。時期決定できる遺物は出土していないものの、2 層には桜島文明軽石が混じっており、中世以降の形成と把握される。また、灰色味の強い色調等からは近世以降の可能性が高いと考えられた。

また、昭和初期の段階で耕地整理がなされたとの事であり、1・2 層の多くはこの段階前後の形成と考えられた。

これらの状況より、開発予定地の一部には近世以降の可能性のある耕作土層が残るものの、多くは昭和の耕地整理以後の形成層であり良好な遺跡が残存する可能性は低いと判断された。

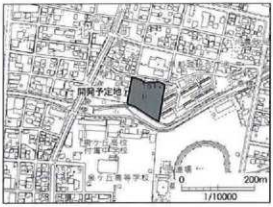
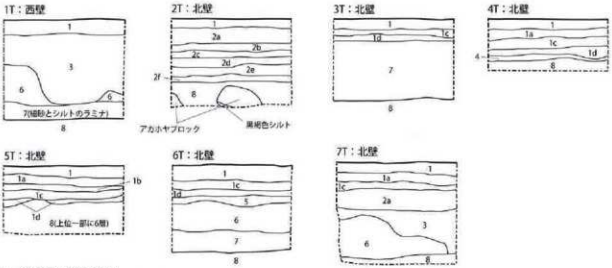


図 1. 調査区位置

図 2. トレンチ配置

図版 1. 2T(南から)

図版 2. 2T：北壁土層



1　暗灰色シルト(現耕作土)
1a　暗灰色砂質土(5mm以下の黄色軽石・白色軽石ごく少量，造成土)
1b　暗灰褐色砂質土(1cm以下の黄色軽石・白色軽石ごく少量，造成土)
1c　褐色砂質土(1cm以下の黄色軽石・白色軽石少量，5cm程度の黒色土ブロック混，造成土)
1d　暗灰色砂質土(3cm以下の黄色軽石多量，造成土)
2a　灰色シルト(5mm以下の黄色軽石・白色軽石ごく少量，旧耕作土)
2b　明灰色シルト(5mm以下の黄色軽石・白色軽石ごく少量，旧耕作土)
2c　灰色シルト(5mm以下の黄色軽石・白色軽石ごく少量，旧耕作土)
2d　灰色砂質土(1cm以下の黄色軽石・白色軽石ごく少量，旧耕作土)
2e　明灰色砂質土(1cm以下の黄色軽石ごく少量，旧耕作土)
2f　灰色砂質土(細砂・1cm以下の黄色軽石・白色軽石微量，旧耕作土)
3　黒色土・黄色軽石・灰色シルト・鬼界アカホヤ火山灰・暗褐色土の混(撹乱)
4　暗灰色砂質土(白色砂をやや多く含む)
5　灰色砂・黄色軽石・白色軽石のラミナ状堆積
6　灰色シルト(一部に砂のラミナ状堆積)
7　砂・黄色軽石・白色軽石・鬼界アカホヤ火山灰・黒色土ブロック・5cm以下の砂利のラミナ状堆積
8　灰色砂・10cm以上の礫・鬼界アカホヤ火山灰・黒色土ブロック・灰色シルトのラミナ状堆積

図 3.　トレンチ土層・平面

図版 3　3T(南から)

図版 4　6T(南から)

図版 5.　全景 (南西から)

図版 6.　重機使用状況

19. 梅北北原遺跡 (第 2 次調査)

所 在 地	梅北町 1781-4 市道上	担 当 者	山下大輔・加覧淳一・玉谷鮎美
調査原因	耐震性貯水槽設置工事		
調査期間	2015.2.5-10	調査後の措置	工事立会
調査面積	34㎡		

位置と環境 開発予定地は盆地南部、梅北川右岸に展開するシラス台地・成層シラス台地面(梅北台地)のほぼ中央に位置している。現況は市道である。周辺では中郷中学校校舎建替えに伴い 2006 年に梅北北原遺跡、王子原団地建替えに伴い 2010 年に王子原遺跡で発掘調査 (第 4 次調査) が実施されている。梅北北原遺跡[1]では縄文時代早期の遺物や集石遺構、王子原遺跡[2]では古代～中世の建物跡等が確認されている。また、今回の調査番号は「梅北北原遺跡 2015- ⑥」であるが、比較的面積のある調査となったため、2006 年調査を第 1 次調査とし「梅北北原遺跡 (第 2 次調査)」と呼称している。

調査の結果 本開発は現道内にあたり事前の確認調査が困難であったため、掘削時の工事立会を実施した。しかし、重機による掘削作業の立会時に多量の土師器 (古代～中世) が出土したため、工事を一時停止し、記録を行った。その範囲は既存水道管や勾配による掘削面積の減少などを考慮し、工事により遺跡が影響を受け、かつ現況で調査が可能な範囲約 35㎡を対象とした。

基本的な層序は上位より Ⅰ 層:現道およびそれに伴う造成土、Ⅱ 層:桜島文明軽石 (一部に薄く堆積)、Ⅲ 層:黒色土、Ⅳ 層:黄色軽石をまばらに含む黒褐色土、Ⅴ 層:黄色軽石を多く含む黒褐色土、Ⅵ 層:霧島御池軽石漸移層、Ⅶ 層:霧島御池軽石、Ⅷ 層:黒色土、Ⅸ 層・Ⅸ b 層:鬼界アカホヤ火山灰および軽石・豆石、Ⅹ 層:黒褐色土、Ⅹ Ⅰ・Ⅹ Ⅰ b 層:桜島 11 火山灰遺集層、Ⅹ Ⅱ 層:灰褐色土、Ⅹ Ⅲ 層:灰褐色土 (ロームブロックを含む・桜島薩摩火山灰か) となる。

遺物包含層は Ⅲ 層上部が主体である。Ⅳ 層では少量の弥生土器等が出土するものの、Ⅴ 層以下ではほとんどみられなかった。遺物の時期は縄文時代・弥生時代・古代～中世である。

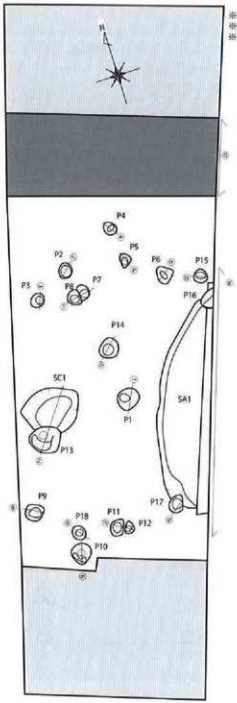
縄文時代の遺物は晩期の組織痕土器 (1・2) がわずかに確認される。弥生時代の遺物は中期後半の山ノ口式土器 (3 ～ 12) が一定量みられる。遺物の主体は Ⅲ 層より多量に出土した土師器 (15 ～ 32) である。特に小皿が多い。白磁椀Ⅳ類 (33 ～ 35) や白磁皿Ⅵ類 (41) と考えられる資料[3]、土師器形態等より、11 世紀後半～ 12 世紀前半頃が主体と思われる。ただ、底部切離し技法が「糸切離し」(21) もあり、それ以降の資料も存在する。

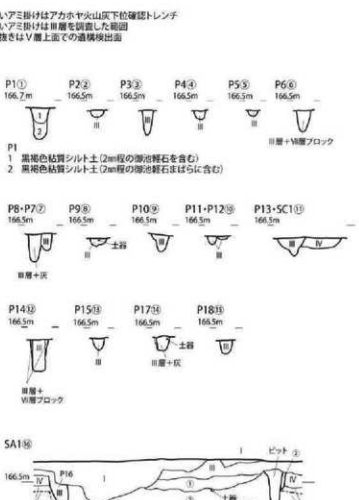
遺構の検出は Ⅴ 層中の例が多いが、遺構埋土および調査区壁の土層断面からは、本来の掘り込みは Ⅳ

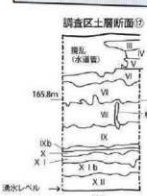
1) 都城市教育委員会. 2007.「梅北北原遺跡」
2) 都城市教育委員会. 2012.「王子原遺跡 (第 4 次調査)」
3) 太宰府市教育委員会. 2000.「大宰府条坊跡Ⅹ Ⅴ - 陶磁器分類編 -」

図 1. 調査区位置 1

図 2. 調査区位置 2







Ⅰ：灰褐色砂質土（白色軽石を多く含む）＝原道（上部はアスファルト舗装）
Ⅱ：灰白色粘石＝桜島文明軽石（調査区の一部のみに薄く堆積）
Ⅲ：黒色粘質シルト土（弥生時代～中世の包含層）
Ⅳ：黒褐色粘質シルト土（御池軽石をまばらに含む）
Ⅴ：黒褐色砂質シルト土（御池軽石を多く含みサラサラする）
Ⅵ：黒褐色砂質シルト土（御池軽石を多く含み硬くしまる）＝御池軽石漸移層
Ⅶ：黄橙色軽石＝霧島御池軽石
Ⅷ：黒色粘質シルト土（粘性強い）
Ⅸ：橙色火山灰＝鬼界アカホヤ火山灰
Ⅸb：火山軽石・豆石
Ⅹ：黒褐色砂質シルト土（黄橙色軽石をまばらに含み硬くしまる）
ⅩⅠ：黒褐色砂質シルト土（黄橙色軽石・褐色スコリアを多く含む）＝桜島P11火山灰農集層
ⅩⅠb：灰褐色砂質シルト土（橙橙色軽石・褐色スコリアを多く含む）＝桜島P11火山灰農集層
ⅩⅡ：灰褐色砂質シルト土（黄橙色軽石をまばらに含む）
ⅩⅢ：灰褐色砂質シルト土（灰白色ロームブロックをまばらに含む）＝桜島薩摩火山灰か

図 3. 遺構平面・土層

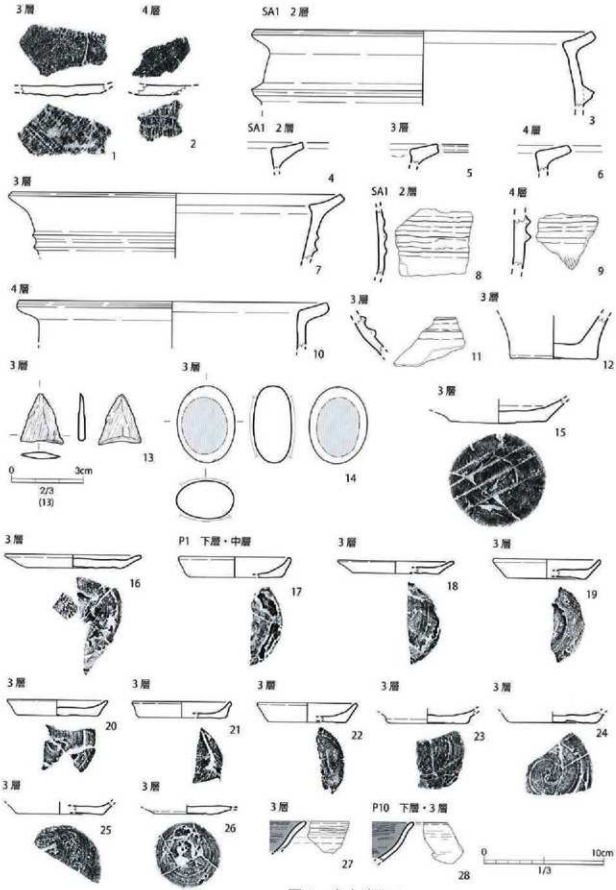

3層
4層
SA1 2層
1
2
3
SA1 2層
3層
4層
4
5
6
3層
SA1 2層
4層
7
8
9
4層
3層
3層
10
11
12
3層
3層
3層
13
14
15
0
3cm
2/3
(13)
3層
P1 下層・中層
3層
3層
16
17
18
19
3層
3層
3層
3層
3層
20
21
22
23
24
3層
3層
3層
P10 下層・3層
25
26
27
28
0
10cm
1/3

図 4. 出土遺物 1

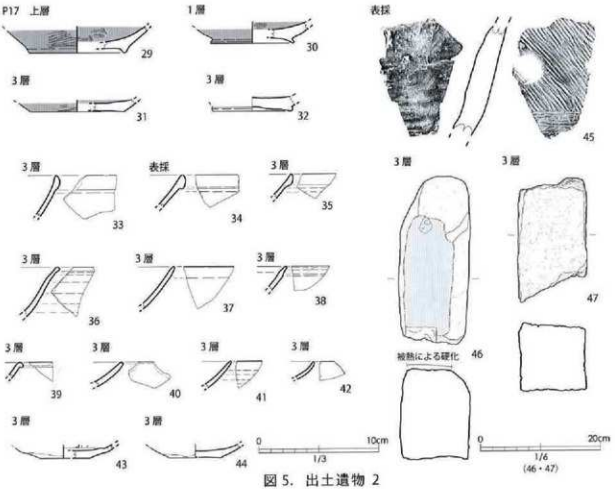


図 5. 出土遺物 2

層上面よりも上位であったと考えられる。弥生時代の竪穴住居跡 1 基 (SA1)、古代～中世期と考えられるピット 18 基、土坑 1 基 (SC1) を検出した。

SA1 は調査区の東壁に沿って確認された。円形の平面形と考えられ、調査区外へとのびる。出土遺物 (3・4・8) から、弥生時代中期後半の山ノ口式期の住居跡と捉えられる。古代～中世期と考えられるピットや SC1 の埋土の多くは Ⅲ 層起源と考えられた。多数のピットが検出されたが、調査区が狭小であったこともあり、確実に掘立柱建物跡を構成すると考えられる配列は抽出できなかった。

これらの状況より、開発予定地には弥生時代および古代～中世の集落が存在し、周辺にも広がる可能性が高いと考えられた。また、調査区の一部にて、霧島御池軽石層 (Ⅶ 層) および鬼界アカホヤ火山灰 (Ⅸ 層) よりも下位の調査を行ったが、遺物の出土は無く、遺構も検出されなかった。

図版 1. 工事立会状況

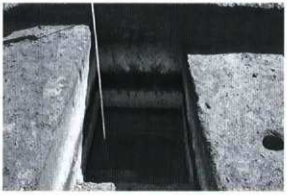
図版 2. 作業状況

図版 3　検出状況（南から）

図版 4.　完掘（北から）

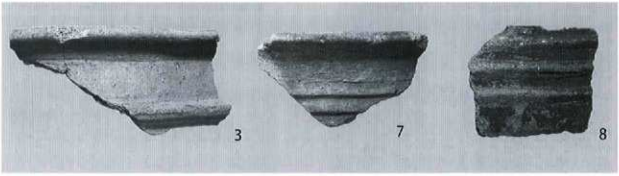
図版 5.　SA1

図版 6.　P1



図版 7.　深掘りトレンチ（西から）

図版 8.　深掘りトレンチ最下層



図版 9.　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みやこのじょうしないいせき　9
書名	都城市内遺跡　9
副書名	
巻次	
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第125集
編著者名	近沢恒典
編集機関	都城市教育委員会事務局文化財課
所在地	宮崎県都城市菖蒲原町19-1-16　郵便番号885-0034　電話番号(0986)23-9547
発行年月日	2016年3月25日

遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
祝吉第３遺跡①	都元町 3425-3	31.738996	131.099861	4/2	2㎡	個人住宅
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	なし	なし		なし		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
祝吉第３遺跡②	都元町 3425-6	31.739101	131.099549	4/7	3㎡	個人住宅
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	中世	土師器		溝状遺構・ピット		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
宮穴遺跡	銀座町 1838-2 ほか	31.734209	131.019852	4/13	28㎡	宅地造成
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
散布地	中世	なし		ピット		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
梅北北原遺跡	梅北町 1819	31.685662	131.066688	5/1	12㎡	農業基盤整備事業（天地返し）
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	中世	土師器・陶磁器		なし		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
中町遺跡	中町 47 ほか	31.727679	131.06639	5/23	8㎡	その他開発（公有地処分）
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	なし	なし		なし		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
都城跡	都島町 164-2 ほか	31.717492	131.049908	5/29	12㎡	その他開発（公有地処分）
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
城館跡・集落跡	中世	土師器・陶磁器		なし		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上ノ村第２遺跡	鷹尾一丁目 3604-4	31.725026	131.051468	6/23	12㎡	その他建物（相屋施設）
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	中世・近世	土師器・陶磁器		溝状遺構・土坑・ピット		新規発見
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
田谷・尻枝遺跡	南横市町 3921-1 ほか	31.743258	131.033098	7/7	28㎡	宅地造成
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	弥生	土器小片		なし		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
祝吉第３遺跡③	都元町 3417-1	31.739513	131.099203	7/29	28㎡	その他開発（太陽光発電施設）
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	中世	土師器・陶磁器		ピット		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
都城個主館跡	姫城町 3883-2	31.71888	131.060119	8/10	6㎡	個人住宅
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
城館跡	近世	土師器		溝状遺構		

遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
高田遺跡	早稲町 2103 ほか	31.71325	131.077048	8/26 ～ 27	60㎡	その他建物（店舗・事務所等）
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡・生産遺跡	中世	木製品		水田跡		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
八幡域遺跡	南熊尾町 612-1	31.715561	131.044883	10/7	20㎡	個人住宅
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	中世	陶磁器		竪穴状遺構・ピット		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
高田遺跡	早稲町 2103 ほか	31.71325	131.077048	10/19 ～ 21	430㎡	その他建物（店舗・事務所等）
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡・生産遺跡	中世	土師器・陶磁器		なし		工事立会
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上ノ園第 1 遺跡	早稲町 1747-3 ほか	31.718721	131.07371	10/22	12㎡	集合住宅
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
散布地	古代	土師器・須恵器		溝状遺構・ピット		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
村ノ前遺跡	都元町 2833	31.74318	131.099114	10/26	13㎡	宅地造成
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
散布地	中世	土師器		溝状遺構		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
母智丘原第 2 遺跡	横川町 6644-4	31.751106	131.014696	12/17	16㎡	その他建物（福祉施設）
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	古墳	土器小片		なし		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
中大五郎第 2 遺跡	丸谷町 3370-1	31.804822	131.073192	12/18	18㎡	工場
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	なし	なし		なし		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
木ノ下遺跡	高城町有水 3356-4	31.854551	131.135341	12/25	2㎡	個人住宅
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
散布地	縄文	石器				
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
年足川遺跡	北原町 1710 ほか	31.731255	131.078058	1/5 ～ 6	28㎡	宅地造成
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	なし	なし		なし		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
梅北北原遺跡（第 2 次調査）	梅北町 1781-4　市道上	31.684247	131.070238	2015/2/5-10	34㎡	耐震性貯水槽
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	縄文・弥生・古代・中世	縄文土器・弥生土器・土師器・陶磁器		竪穴住居跡・ピット		工事立会

都城市文化財調査報告書　第125集

都城市内遺跡9

2016年3月25日

編集・発行　都城市教育委員会事務局　文化財課
宮崎県都城市蒲生原町19-1-16
郵便885-0034　電話(0986)23-9547
印刷・製本　株式会社　文昌堂
宮崎県都城市都北町7166
郵便885-0004　電話(0986)36-6600